

《若きカフカス人》と旧制新潟高等学校 — 中原悌二郎を支えた妻信の愛 —

山浦健夫

彫塑家中原悌二郎（一八八八—一九二二年）が制作した《若きカフカス人》と題するブロンズ像は、新潟大学が所蔵する美術品の中で代表的なものの一つである（図1）。この作品は現在本部の学長室に置かれているが、各地の美術館からの出品依頼に応じて貸し出され、展示されることが多い。その個性的な作品名は次のような理由でつけられたようだ。



図1 中原悌二郎《若きカフカス人》
1919年 国立大学法人 新潟大学所蔵

「若きカフカス人」のモデル、イリア・ニンツア^(マコ)はコーカサスの南端クタイスル（山浦注、現在の国名はジョージア。クタイシ）に生まれた。そこは、カスピ海と黒海の間にかフカス山脈がある土地で、この作品の題名はモデルがそこで生まれたことから命名されたのであろう。

大正八年（一九一九）夏に作られ、同年九月の第六回再興日本美術院展に出品された。それから、約百年が経過している。そして、日本近代彫刻史では日本人



図2 中原悌二郎《平櫛氏像》
1919年（公財）碌山美術館所蔵

人の方が馴染み易いのか、人気がある。現在、このブロンズ像は、オリジナル（石膏原型から直接铸造した作品）に複製（作品から型取りして铸造した作品）を加えると、全国に十五点以上存在する。新潟大学の所蔵品は早い時期に作られたオリジナルと言われている。元来旧制新潟高等学校の所蔵であったのが、昭和二十四年（一九四九）に学制改革で新潟大学になり、備品の一つとして一時理学部に引き継がれたのである。

そもそも北海道の生まれで、新潟とはほとんど縁のないと思われる中原の作品が新潟にあるのはなぜだろうか。中原の妻・信（のぶ 一九二一—一九五四年）が新潟県出身だったからだと言われているが必然性があったのか。その辺をひもとく手がかりとなりそうな記録が信の著した『中原悌二郎の想出』（日動出版部、昭和五十六年）で、関係者の尽力で、彼の死後六十年後に出版されたものだが、当事者側の記録としては大いに参考となる。ここには、信の故郷における生活も書かれているが、今までの中原研究では見逃していた事柄も少なくない。新潟市出身で近代彫刻に関心のある筆者が、地元における中原や信、その兄弟のことをさらに掘り下げてみたいと思ったゆえである。

による構築性を持った数少ない優れた作品として高く評価されている。中原の作品の中では、『平櫛氏像』（図2）の方が完成度は高いと筆者は思うが、一般には《若きカフカス

おいたち

中原信は旧姓伊藤、明治二十五年（一八九二）二月十二日、南魚沼郡六日町（現南魚沼市）で生まれた³。父は伊藤亀之助（一八五八年生れ）、母はヨシ（一八六六年生れ）、夫妻は男四人、女五人の子供に恵まれ（巻末附表）、信は上から四番目で次女であった。亀之助は、もともとは長岡藩の下級士族であったらしいが、不明な点が多いという。明治四年（一八七一）の『柏崎県職員録』では柏崎県出張川浦役所（旧中頸城郡三和村にあり―明治二年に設置）に勤めていたことがわかるのみである⁴。

母ヨシは美術評論家匠秀夫氏によると秀才で優秀な子弟が集まる藩校で学んだ少女時代は首席を通じたという⁵。戊辰戦争で焦土と化した長岡の復興を任された小林虎三郎の教えもあってか、両親は勉学に理解があり、長岡にいるよりも学問を積んで、外に出て活動することを望んだのであろう。子沢山であったが、男子は旧制中学校、旧制高等学校、大学まで進学させていた。女子も高等女学校で学ばせている。

新潟市に転居

亀之助とその家族は、明治三十年頃には新潟市学校町通二番町に住むようになった。大正十四年新潟市発行の『新潟市二級有権者名簿』によると「大正十四年二月現在」、伊藤亀之助がここに住んでいたことは間違いない。中原悌二郎の信あての書簡には、住所は「岡本小路」となっている。岡本小路は学校町通から海岸へ向かって行く道の通称である。近くにあった岡本醸造所に由来するという。一世記以上隔って境界の変化は激しく、伊藤家の住居跡は特定できない。

長男成章（一八八五年生れ）は旧制長岡中学校を卒業して、早稲田大学に入学、卒業後は南満洲鉄道株式会社（満鉄）に就職している。次男

武夫（一八八七―一九六八年）は明治三十九年（一九〇六）旧制新潟中学校を卒業して、第一高等学校、東京帝国大学に進学、大学の教官を勤めた。

信は鏡淵小学校を卒業後、明治三十七年（一九〇四）、新潟高等女学校（現在の県立新潟中央高等学校）に入学した。日露戦争のさなかであったこともあり、何事にも質素節約が求められていて、服装や髪型が華美にならないよう学校からは求められた。兄弟が多い信にとっては、むしろ好ましい事だったという。信は一方で兄が借りてきた坪内逍遙のシェイクスピアの本を片っ端から読むなど、文学少女ぶりをみせている。

最初の結婚

信は新潟高等女学校を明治四十二年（一九〇九）三月に卒業した。卒業すると十七歳で縁談が持ち込まれる。相手の家が信の嫁ぎ先として良い家に見えたのであろう。母ヨシが大いに乗り気だったという。「明治四十二年八月、北蒲原郡本納津村の霜鳥四郎と結婚した」と『中原悌二郎の想出』（二〇二頁）に書かれている。これが他の本にもそのまま引用されてきた。だが、当時の新潟県には、このような村名はない。「本納津村」ではなく「西蒲原郡米納津（よのうず）村」の誤りである。「婚家は新潟市から十里ほど田舎の、界隈に少しは知られた地主で、北海道には商店を経営したり、農場を方々に持っていました。」とあることから、米納津村の霜鳥家であろう。「新潟市から十里」（約四十キロ）というのも合致する。のちに米納津村は西蒲原郡吉田町に合併し、さらに現在は燕市になっている。霜鳥家は大正十三年（一九二四）は、五十三町歩（53ヘクタール）を所有して、土地の所在は三郡十一町村にわたった⁷。当時、当主には子供が無く、末弟が養子となり「私はこの養子にめあわさるべく嫁がされました。」という。一見信にとって恵ま

れた結婚話のようであったが、信が町場育ちの女学校出、しかも若い上に世間知らず。朝早くから働かずくめの農家の嫁の仕事は好きな本も読めず、務まるものではなかったであろう。家の中では孤立無援、ノイローゼになってしまい、夫と共に東京に転居する。ここで信は岡田虎二郎の主宰する岡田式静坐法に入門する。静坐法は岡田により、座禪を改良発達させたもので、当時、健康を気遣う東京市民に支持されていた。その会で信は、実業家の相馬黒光に出会い、やがて中村屋に出入りするようになる。

そのような折、夫は投機に失敗し、実家に引き戻されることになった。そして、二人は離婚してしまう。信も新潟市の実家に一旦戻るが、東京での生活が忘れられず、再度上京すると、中村屋に住まわせてもらい、静坐法に向き合うのだった。

中原悌二郎との出会い

中原悌二郎は明治二十一年（一八八八）、北海道釧路町（現釧路市）に生まれた。中原家はもともと越後の出身で、雑貨商を営んでいた。明治三十年（一八九七）、旭川で雑貨商を営んでいる叔父夫妻の養子となる。明治三十五年（一九〇二）、旧制札幌中学校に入学するが、三年生の途中に中退、洋画家を志して東京に上る。窮乏生活の中、白馬会洋画研究所で一年余りデッサンを学んでいる。そして、明治四十年（一九〇七）二月にはより活気のある太平洋画会の研究所（洋画）に移っている。ちなみに白馬会洋画研究所で中原はのちに親友となる中村彝（一八八七—一九二四）に出会っている。

明治四十一年、荻原守衛（一八七九—一九一〇年）がフランスから帰国した。荻原は彫塑家で、ロダンの薫陶を受けてきたのだった。中村屋の近くにアトリエ兼住居を構え生活を送っていた。中原は中村彝と訪問

して荻原の作品に感動、たびたび訪れて最新の美術の話を聞いたのだった。さらにロダンに感動していた中原は、荻原の急逝（明治四十三年四月二十二日）前後、彫刻に転ずることを決心し、太平洋画会の彫刻部に移ると、会員の新海竹太郎の指導を受けるようになった。

明治四十四年に中村彝は、中村屋裏のアトリエに移り制作を始めた。彝のなりふり構わない生活を見て、相馬黒光は自分たちと一緒に食事をするように勧め彝もこれにしたがっている。おかげで、彝と信の接する機会も多くなったし、中原も彝を訪ねて行っただけで信を見かける機会が多かったであろう。

しかし、中原は今までの無理な生活がたたり、大正三年から一年半、結核療養のため養父のいる旭川市に帰郷、静養せざるをえなかった。後に復調して上京、大正五年（一九一六）四月には、本人の希望で日本美術院研究所（彫刻部）に入る。ここで、近代彫刻の俊英たち——平柳田中、石井鶴三、佐藤朝山らを知った。ここでの制作、研究は大いに力となった。同年九月、石井鶴三をモデルに《石井氏像》を制作、第三回再興美術院展に出品した。これは樗牛賞を受賞し、院友に推薦された。樗牛賞は高山樗牛の没後に設けられ、若手の芸術家の生活を助けるためのいわば新人賞である。多い金額ではなかったが賞金も支給された。制作途中の《石井氏像》を見た彝は「萬歳だぞ、中原、到頭君は素晴らしいものを造つて了つた！」と絶賛した。信も意識して中原の作品を見たのは、これが最初であった。

初めて私はしみじみと眺めて、驚嘆いたしました。「いいですねえ。」しかしこれ以上、私は何と言っているかわかりませんでした。ただ「いいですねえ、いいですねえ」と友人と二人で眺めていました¹⁰。

彫塑という難しい物と思われて敬遠されがちだが、信は中原の作品を正しく受けとめている。信は上京後、裁縫学校に学んでいた。そこを卒業する時には、彝から薔薇とカーネーションを描いた作品を貰った《静物》二三・六×三三・八センチ、大正四年)。また、年末には、羽織の仕立てを頼まれ、納品するとお礼に花と林檎を描いた小品を貰った《静物》一五・三×二二・五センチ、大正四年)。こういうやり取りの中で、彝は信の人柄を見抜いていたのであろう。信は彝宅に行った時、中原との結婚を勧められる。彝が間を持ったおかげで、中原と信は婚約することになった。また彝はパトロンの今村繁三に掛け合って、中原に月十円の援助を頼んでいる。金額は決して多くはなかったが、これによって中原の生活の安定が図られた。だが、「中原の都合で(結婚は)一年くらい先にという事¹¹⁾」になり、信は結婚準備のため新潟市の実家に戻った。東京の中原と新潟の信は文通を始める。中原の手紙が信の手元へのこされていて、「伊藤信への手紙」として、二度目に出版された『彫刻の生命』(中央公論美術出版、昭和五十三年)で掲載、紹介されている。信からの手紙は紹介されていないのでやり取りの全貌はわからないが、中原の信への愛情は強く感じられる。「中原の都合」というのは、中原が今は日本美術院の研究所で彫塑を勉強をすべきとして判断したからである。信は結局、中原に二年以上も待たされる事になるが、彼女は中原が今は大事な時期とうすうす気がついていたのである。¹²⁾

大正五年十月二十五日

先日は突然御邪魔を致しまして誠に御気の毒でした。其の後如何で御座います。何う言ふものか私は、あなたの事ばかり考へて居りますよ。(中略)ほんたうに是からは彫刻の方を一生懸命にやりますよ。

よ。只に、うまい彫刻が作りたいばかりではなく彫刻を以て食べて行ける様になりたいのです¹²⁾。

大正五年十一月九日

私は非常にあなたを愛して居るのですよ。だん／＼あなたと御話をして居る中に種々とあなたの性格の中に可愛らしい美点を発見して行く事が出来ます。是が私には非常に愉快です。私達はお互にだん／＼理解し合って行く。そして御互の愛情の強くなつて行くのを感じる¹³⁾。

大正五年は暮れ、翌大正六年の四月の日本美術院試作展には前年の文部省美術展覧会(文展)に出品して落選した《墓守老人》を出品した。日本美術院展では、この年から設けられた美術院奨励賞を受賞した。当然ながら文展と日本美術院では鑑査する基準が違う。文展では中原の作品は肌あいのごつごつして未完成とみなされたのである。同じ年、中原は《福田久道の首》、《裸婦トルソー》を制作したが、壊している。《男の脚》も五ヶ月かけて作ったが、意に沿わず壊してしまう。結局、秋の院展に出品することはなかった。また、大正七年、《裸婦トルソー》を制作中偶然破損してしまい、これも壊してしまう。残っていれば、見ごたえのある像になっていたと思うので残念である。さらに初夏から八月末まで、東京谷中清水町の佐藤朝山のアトリエで《行乞老人》を制作した。それに関連して、中原と信の間で次のようなやりとりがあった。

大正七年七月二十六日

又例の墓守の御爺さんにも頼まうかと思つて居る。若御爺さんが承知してくれたら費用をあなたに御願しやう。二拾円もあれば沢山

だ¹⁴。

大正七年八月一日
昨日御手紙を拝見
した。其の節替為
もたしかに頂戴し
た。モデルの方も
例の御爺さんが喜
んで承知してくれ
た¹⁵。



図3 中原悌二郎《行乞老人》1918年
(公財) 碌山美術館所蔵

中原はこの像を制作するのに、信が働いてためたお金を貰って作ったのである。《行乞老人》(図3)と名づけられたこの作品は九月の第五回日本美術院展に出品し、同人に推挙された。彫刻部の同人になるにあつても日本画、洋画部同人の同意を受ける必要があつた。

大正七年九月七日

同人推選の事は内定して居ると言ふ噂だけだ。最も昨年もそんな様な話があつたが出品しなかつたので沙汰止みになつた。今年は出品すれば同人になるかも知れぬ。然しさう言ふ事は幹部の意向にあるので未だ何ともわからぬ。然しこんな事は日本画の連中には生活上に影響するので大問題だが僕等には何うでも良い事だ¹⁶。

大正七年十月十四日

其の後忙しかつたため永らくご無沙汰をして誠に申しわけない。只今は見事な梨を送つて戴いて誠に有難う¹⁷。

十月、中原は日本美術院展が京都に巡回した時、平櫛田中、石井鶴三、堀進二らと奈良を旅行し、古代の仏像彫刻を見て回つた。そして、いよいよ、中原と信は結婚に向かつて動きだした。

大正七年十二月六日

それから御手紙によると結婚の式も兎に角正式にやるつもりで居るらしいが、それ等に要する費用の事は何とも言つてくれないが、全部あなた方に出して貰つてよいのか(中略)。式服の方はあなたの兄さんのを有難く借用する事にする¹⁸

中原は年末の十二月二十七日、新潟市に向かう。二十九日、西大畑町の新潟大神宮で結婚式をおこなつた(図4)。信は両親に中原を紹介することで安心させたかつたのであろう。中原の羽織・袴は手紙どおり兄武夫の持ち物を借りたのであつた。出席者は新郎新婦の他、信の両親、兄成章と武夫であつた。信の実家のある学校町通二番町から、新潟大神宮まで直線距離で二キロくらいある。

二人の結婚式当日は大雪で「綿をちぎつたような雪がボサリ、降つておりまして。門を出て一丁ばかり、俣が町角を曲るとき、ぐらりと大きく揺れた拍子に、嶋田に挿した花簪が抜けて落ち、雪の中に真直に一尺もささつたのを覚えております¹⁹」とも語つている。



図4 新潟大神宮での挙式の中原悌二郎と伊藤信
(大正7年12月29日)

新潟では大晦日の日没から新年と認識されていて、その夕食にご馳走を並べる。中原は伊藤家の新年の祝い膳につき、新春三が日を新潟で過ごした。

信によると、中原の簡単な日記がある²⁰。

大正八年一月一日

晴天 新潟にて新年を迎ふ。

二日 晴天 朝市を見る。

三日 暴風雪。

四日 暴風雪 午後五時半新潟発。

中原たちが二日の日に見に行った朝市は、本町（ほんちょう）通りの名物で、露店が多く出店し、買い物客も詰めかけた（図5）。四日、中原は家族「一同の引き止めるのも聞かず」東京へ戻って行った。とにかく制作がしたくてたまらなかつたのだろう。

中原の手紙には

大正八年一月二十四日

皆さん御変りも無いさうで何よりで御座います。私も相変らず元気で制作を続けて居ります故御安心下さい。それから入籍の事も旭川の方へ言うてやりました故遠からず手続するだらうと思ひます²¹。

二月一日、中原は日本美術院第五回試



図5 「新潟朝市場」 絵葉書 1910~20年代

作展に素描二点を出品した。今まで中原は下宿に住んでいたが、信と一緒に住める一軒家を探す。そして、四月五日に上京した信を日暮里渡辺町一〇四〇番地（現在の荒川区西日暮里四丁目）の新居に迎えている。渡辺町は水道、ガス、電気の供給があり、電線は全て埋設されていた。この新しい家で、美術院彫刻部同人達―石井鶴三、平柳田中、佐藤朝山、堀進二等を招いてささやかな結婚のお披露目をおこなった。

《若きカフカス人》の制作

大正八年（一九一九）、日本美術院の研究所で中原は生涯で唯一の全身像《憩える女》を制作した。最後まで中原が手を入れて作った塑像で、画廊でブロンズにしたものを売りに出したが、売れることはなかった。妻信が作品の出来栄を褒め、後で中原から貰ったと伝えられている。

夏、中国のハルピンにいた画家の鶴田吾郎の紹介で、中村屋の相馬夫妻のもとにニンツァーがやってきた。彼はロシア革命後の兵営から抜け出して、アジア大陸を放浪してきたという。

この野性味を帯びた若者の風貌に惹かれて、中原は彼にモデルを依頼する。ちょうど、中村舞が静養のため一ヶ月茨城県に行く事になり、落合のアトリエ（現在の新宿区立中村舞アトリエ）が空いたので、そこを借りて制作することになった。中原は午前中、この像を作ることにあって、昼になると自宅に帰り、共に信が作った昼食を食べた。中原はニンツァーにモデルを一ヶ月位願いたいと頼んだが、制作途中に本人との意見の対立で、結局二週間で止めざるをえなかった。ニンツァーは、中原が作った自分の像が気に入らなかつたのか、「中原は鬼を作ります²²」と信に訴え、彼女がなだめるのもきかなかつた。ニンツァーが今すぐ壊しそつたので、石膏にとり、すぐ铸造所でブロンズにされた。像は制作時間が足りなかつたせいか、後頭部は作られていない。そして、全

体の表現も《行乞老人》のような執拗さは無く、かえって見る人にはとりつき易い。葬はこの像に「一見古代の十二神将の像」を見ていた²³。中原はロダンの影響を受けながらも、東洋的な造形感覚も入れてこの像を制作していたのである。

中原は九月の第六回日本美術院展に《若きカフカス人》(ブロンズに鑄造したもの)と先に紹介した《憩える女》を出品した。この像は、称赞と酷評相半ばして話題作となった。フランスでロダンの助手を務め、二科会の彫刻部を作った藤川勇造は、「院展では中原悌二郎氏の《若きカフカス人》が一番よく見えた。しかし、二度見た時はあまりいいものとは思はなかった。非常に固く窮屈な感じがした。」とも言っている²⁴。

中原悌二郎の死

中原は大正八年秋から彫刻家平櫛田中をモデルに前述のように《平櫛氏像》を作ったが、途中体調不良となりこの像は未完成のまま手をつけられることはなかった。

大正九年になると、中原は彫刻の制作ができなかった。美術院の研究所にも行くことはできず、休みがちになる。油彩の作品も描いたが、未完成に終わる。代わりに、評論を多く書き「中村彝論」、「帝展彫刻短評」など残している。夏までは旭川から出てきた養父の東京見物に対応したり、初夏、石井鶴三と八ヶ岳登頂を企て、七月には渡欧する保田龍門の送別会の世話役を務め、横浜まで見送りに行くなど行動的であった。九月には「フランス現代美術展」でロダンの《考える人》を初めて見ることができた。

寒さに向かつて病勢多いにすすむが、岡田式静坐法を固く信じ、友人達の勧める他の治療法に一切関心を示さなかった。大正十年一月十七日病臥の床につく。三月中旬より咯血あいついで絶対安静となり、三月二

十八日午前七時二十分に自宅で亡くなった。三十二歳であった。信は次のように嘆いた。

「嗚呼、何故、死んだ。何故、あなたばかりこんなに早く死んだ。通夜の晩暗い部屋に暫く一人横になると今までこらえていた涙が一時に堰を切って流れ出ました。漸く家庭を持って生涯の方途もほぼ定まり、長年、彼を苦しめた物質上の願いからは解放されて、規則正しく彫刻の勉強も出来得るようになり、是からというところでございましたものを²⁵。

「長い婚約の三年、結婚生活二年。これが中原悌二郎と私とのこの世におけるすべてでございました。」とも、信は書いている²⁶。いつのまにか信には、中原に対して思慕というよりも信仰に近い気持ちが芽生えていたという。

《若きカフカス人》と旧制新潟高等学校

旧制新潟高等学校は大正七年、地元の熱心な誘致で設置が決まった官立の学校である。大正八年、新潟師範学校の校舎を借りて開校し、大正十一年、近くに新校舎を建築した。新校長は八田三喜。石川県出身で、東京帝国大学を卒業してから、新設の旧制佐渡中学校校長を務め、その後旧制東京府立第三中学校(現在の都立両国高校)の校長を十七年務めた。学生ら若者は音楽や美術などの芸術に親しむ事が大切だとして校内での展覧会、美術品の購入展示をおこなった。

新潟大学のもと教官だった近藤フヂエ氏は、大正十年には安宅安五郎の《砂丘に立つ子供》(油彩、大正十年第二回帝展特選作)と《若きカフカス人》は高等学校にあり、新校舎では「講堂と図書館に飾られてい

た。」という。

理学部の購入品台帳では《若きカフカス人》は「昭和九年に寄贈、評価額一〇〇〇円とある²⁷」。《若きカフカス人》本体は学校に先に渡されて展示され実際の寄贈手続きは後になったのであろうか。

《若きカフカス人》はどういう因縁で、旧制新潟高等学校に所蔵されることになったのであろうか。久保尋二氏（新潟大学教授）によれば酒井千尋氏（旧新潟高等学校教員、前畠山美術館館長）が「旧制新潟高校の一室で新潟竹太郎・中原悌二郎の作品の展覧会をやったことがあった。その展覧会が終わってから、新海さんと中原さんが作品を学校へ寄贈されたという文面の手紙を私（久保）に下さいました²⁸」と紹介している。これがいつのことだったのか具体的にはわからない。当時の地元紙『新潟毎日新聞』や『新潟新聞』を見たが、展覧会というほどの催しではなかったのか、記事はなかった。また、土方定一によれば「中村彝は中原の親友であったので、パトロンの今村繁三にこの「カフカス人」を買ってもらい、今村はそれを新潟高等学校に寄贈したので、新潟大学に残ることになった」とある²⁹。今村が持っていた《若きカフカス人》は「露人ブロンズ」として「中原悌二郎遺作展目録」に掲載されている³⁰。しかし、誰がどのような理由で寄贈したのか、結局、結論は出ない。

中原の没後、中村彝、堀進二、平櫛田中の三人が管理委員会を作り原型の管理をおこなうことになった。そして、大正十二年（一九二三）に中原の遺作を希望者に頒布することになり、柏崎町在住で中村彝の後援者洲崎義郎（すのぎきぎろう）にも話が行った。洲崎は生前の中原と面識があり、地元の新聞に書いたり、周囲の人達にもよく話をしていたようだ³¹。おそらく信とも面識があり、同県人ということで話があったのであろう。

近年、洲崎あての中村の手紙がまとまって公開された。

中原の作品の優良なものを（ニンツア、石井君像、女等）ブロンズにして少数の人に分けるらしいのです。僕もなげなしの金をしほって兎に角女と石井君だけ注文しました（年月不明 推定大正十二年上半期）³²。

所で彫刻はどういふうにして御送りしたものでせう。序（ついで）の人でもあれば好都合と存じます。それとも発送の方今次義郎さんが御上京になるまで御持ちすることしませうか（十月二十一日）³³

手紙の中の「ニンツア」は《若きカフカス人》、「女」は《憩える女》である。《石井氏像》を入れて三点のいずれかを、洲崎が購入したと思われる。今、それらの作品は洲崎の家にはのこっていない。

なお、旧制新潟高等学校の《若きカフカス人》は昭和二年、一人の小説家を魅了した。芥川龍之介である。彼は八田三喜校長時代の旧制府立第三中学校（現在の都立両国高校）の卒業生であり、旧制新潟高等学校の文芸部から講演の依頼を一ヶ月前に受けていた。とはいえその来訪は突然であり、講演会も広報する時間がほとんどなかった。五月二十四日開かれた小説家エドガー・アラン・ポーについて「ポオの一面」と題した講演会は学生の他一般市民も大勢集まり、盛況だった³⁴。前日の二十三日八田がいる校長室でこの像を見た芥川は東京に戻ってから「新潟高等学校―誰かこの中原悌次郎氏の「ブロンズ」の若者に惚れるものはないか？ この「若者」は未だに生きているぞ³⁵」と書いたのであった。旧制新潟高等学校に《若きカフカス人》があった最古の記録である。しかし、この二ヶ月後、自らの命を断ってしまう。新潟市での講演が芥川最後の講演会になってしまった。

中原亡き後の信

信は中原の看護中に結核に感染する。長期間の治療が必要であった。

日本美術院では、所属作家がなくなると同人達が作品を寄贈しそれを売却することで現金化し、遺族の生活費に充てていた。信の場合は平櫛田中が作品とお金を管理し必要分を彼女に渡していた。平櫛宛の遺された手紙の中で信は「平櫛先生のおかげです」と感謝の意を表している³⁶。おかげで信は東

京江古田の結核療養所やガーデンホーム、茅ヶ崎の南湖院に経済的な心配をすることなく療養することが出来た。東京在住中にキリスト教に入信し、回復してからは茅ヶ崎の白十字会林間学校で寮母として働く。そして、この創立者の次男で教員の宮腰文夫と昭和三年（一九二八）七月に再婚した。後年娘の美江は信の述懐を思い出し次のように語った。

母の過去も現在の健康状態も、母が八歳も年長であることも悉く承知して温く迎え入れようとする文夫と、常識的には凡そ条件の悪いこの結婚について一言も反対せず理解を示した文夫の母と兄の気持ちにほだされて遂に受け入れる気になったのだそうです³⁷。

そして 昭和五年五月二十四日に長女美江を出産する。病身で高齢だったことから、「主治医の強い反対があった」が、信は「篤い信仰で心を支え」ながら産んだのだった³⁸。



図6 伊藤信（昭和16年 39才）

『中原悌二郎の想出』の出版

昭和十六年（一九四一）になると、信は筆筒の中に大切に保管していた中原の書簡の束を取り出し中原の思い出の原稿を書き始める。四百字詰原稿用紙五百枚にわたる原稿の出版は中原を高く評価していた評論家の森口多里が引き受ける。だが、昭和二十年（一九四五）の空襲で森口の家と共に焼失した。信や寮生達は新潟県六日町に疎開中に終戦を迎えた。終戦後、何もかも不足しているなか、信はもう一度原稿を書き上げた。出版をたびたび試みたが、生存中に果たせることはなかった³⁹。昭和二十九年（一九五四）十月十一日、信は茅ヶ崎で亡くなった。享年六十二歳、その仕事は美江に引き継がれた。おそらくこの信の献身的というべき仕事が多かったら、中原の研究はもっと遅れていたであろう。

澤地久枝の『画家の妻たち』を読むといろいろなタイプの女性が登場する。信は理知的な女性であり、大人の対応ができる人であった。相馬黒光が可愛がり、宮腰文夫が彼女に惹かれて求愛したのもその知性だったのかもしれない。

最後に信の兄武夫について触れておきたい。武夫は中原と気持ちもあい東京にいる信を支えていた。林学博士であり、農林技士、砂防工学の権威であった。大正十年、中原が亡くなるとその年欧州留学をしている。大正十一年に帰国後、津の三重高等農林業学校教授をし、昭和十四年、東京帝国大学農学部教授になった。そして、昭和二十一年、新潟県立農林専門学校校長に迎えられた。昭和二十四年には新制大学となった新潟大学農学部の教授となり、学部長を勤める。新潟大学に赴任している間、武夫は『若きカフカス人』を見る機会があったのであろうか。現在新潟大学の『若きカフカス人』は学部長室のオリジナルの他、複製が理学部と法学部に各一体ずつある。

この小稿は新潟市芸術創造村・国際青少年センター（通称ゆいぽーと）で開催された「めだかの学校」（令和二年十二月五日）講座「若きカフカス人と旧制新潟高校」作者中原悌二郎と妻信の愛」の内容を加筆修正したものです。

謝辞

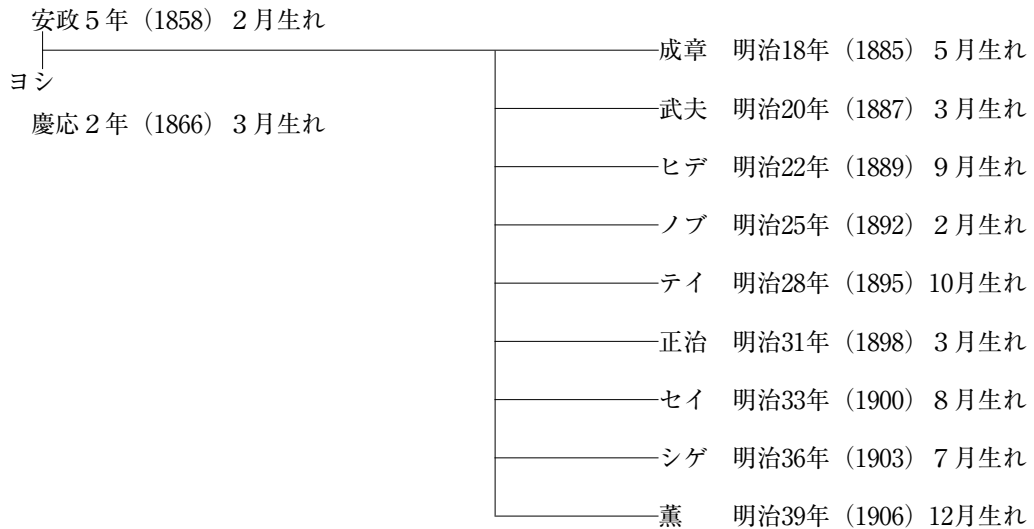
拙稿執筆にあたっては、左記の機関、方々にお世話になりました。改めてお礼申し上げます。

喜嶋奈津代 武井敏 千田敬一 長岡市立科学博物館 東京藝術大学美術館 新潟大学 本井晴信（敬称略）

- 1 千田敬一「大陸の魂」『日本の近代美術II 近代の彫刻』大月書店、平成九年、八九頁参照。
- 2 山浦の調査による。
- 3 「中原悌二郎年譜」『中原悌二郎集』碌山美術館、昭和六十三年、五二頁参照。
- 4 『長岡市史』資料篇4、平成五年、二七頁参照。
- 5 匠秀夫『中原悌二郎』木耳社、昭和四十四年、一七三頁参照。なお、藩校は士分（男子）への教育のみがおこなわれていて、女子への教育はなかった。
- 6 中原信『中原悌二郎の想出』日動出版部、昭和五十六年、四〇頁参照。
- 7 「新潟県大地主名簿」『新潟県史』資料篇第十七巻、六〇六頁参照。
- 8 中原信、前掲書、四〇頁参照。
- 9 中村彝「中原君を憶ふ」、中原信編『彫刻の生命』アルス、大正十年、二一一頁参照。
- 10 中原信『中原悌二郎の想出』前掲書、六三―六四頁参照。
- 11 前掲書、七一頁参照。
- 12 中原悌二郎『彫刻の生命』中央公論美術出版、昭和五十七年、一四四―四五頁参照。
- 13 同書、一四七頁参照。
- 14 同書、一九〇―一九一頁参照。
- 15 同書、一九一頁参照。
- 16 同書、一九三頁参照。
- 17 同書、一九四頁参照。
- 18 同書、一九八頁参照。
- 19 中原信『中原悌二郎の想出』前掲書、一〇一頁参照。
- 20 同書、一〇五頁参照。
- 21 中原悌二郎『彫刻の生命』前掲書、一九八頁参照。
- 22 中原信『中原悌二郎の想出』前掲書、一三〇頁参照。
- 23 中村彝「中原君を憶ふ」、中原信編『彫刻の生命』二二八頁参照。
- 24 藤川勇造「欧州美術界と我美術界との対照」『美術月報』第一巻第三号、大正八年。
- 25 中原信『中原悌二郎の想出』前掲書、三〇頁参照。
- 26 同書、二九頁参照。
- 27 近藤フヂエ「新潟大学美術作品展示品」『環日本海地域の自然・人・文化』新潟大学、平成十一年、一三九、一四一頁参照。
- 28 「埋もれていた名作」『新潟日報』昭和三十九年九月十九日付参照。後に久保尋二著『出会いのスケッチ』（考古堂、昭和六十年）に収録されている。
- 29 土方定一「芥川と中原悌二郎」『現代の眼』第六卷第三号、現代評論社、昭和四十年。一三〇―一三二頁参照。『式場隆三郎』脳室反射

- 30 鏡」展図録」、新潟市美術館、令和三年、五三、五四頁参照。
- 31 「中原悌二郎遺作品目録」「中原悌二郎集」前掲書、一二二頁参照。大正十年十一月七日付『越後タイムス』五面「宮芳平個人展覧会開催（下）」。洲崎は宮の個展についてはあまり触れず中原が世間に知られてきていることを、中村彝とともに喜んでいる。
- 32 大正十四年三月二十九日付『越後タイムス』五面の牧口鉄士の「中原さんと中村さん」では、故人となった二人の美術家を懐かしんでいる。柏崎町の書店でも『彫刻の生命』が販売されていたことが知られるのである。
- 33 松矢国憲「新収蔵 中村彝、洲崎義郎宛書簡類について」『新潟県立近代美術館研究紀要』第一六号、平成二十九年、四二頁参照。
- 34 小見秀男、松矢国憲「中村彝・洲崎義郎宛書簡」新潟県立近代美術館、平成九年、九九頁参照。
- 35 昭和二年五月二五日付『新潟毎日新聞』九面
- 36 芥川龍之介「東北・北海道・新潟」「改造」第九卷第八号、改造社、昭和二年八月。『芥川龍之介全集』第十五卷、平成九年、岩波書店、二四四頁参照。
- 37 井原市立平櫛田中美術館には、信の感謝の書簡がある。
- 38 木村美江「悌二郎の妻信の辿った後半世」『中原悌二郎集』前掲書、一〇五頁参照。
- 39 同書同頁参照。
- （附表）伊藤亀之助、ヨシ夫妻の子女達の名前生年は次の通りである。

伊藤亀之助



『人事興信録 第9版』（昭和6年、人事興信所）より。『同書 第10版』（昭和9年）、『同書 第11版』（昭和12年）まで同じ内容で、夫妻は健在であったと思われる。